

このエッセーは、**図師雅人と田中永峰良佑が、お互いの幼少期から現在までのインタビューを行い、その後本展での利用を話し合う中で、書きあげられたものである。**

田中 永峰 良佑さんをインタビュー後のエッセー

少し遠回りをしたいと思います。このようなかたちで相手のことを語るのに、まとまりよくするのはどうもむずかしい。だから田中さんと言葉を交わしたことを思い返して、等身大に自分の心象の手ざわりに触れた事柄からはじめてみる。そんなふうにしてみるのもいいのかな、とそう思いました。

自分の主語がさだまらないのは何故でしょう。田中さんの予備校の作品（※1）について聞いているときに、田中さんからこの主語の定まらなさについて話があり、それ自分もだ、と思うことがありました。私は、僕は、俺は。息子にはまーさん。他にも仰々しく図師さんはね、と言ったり。そう、誰かに話す時、その目の前にいる人との距離感なのか、僕は（ここでは“僕”がじっくりくるような気がします）主語を、なるべく適切になるよう選びたくります。距離感もその時々で変わるような気がして。話している時にそんなにコロコロ変えたりはしないけれど、時間をかけて僕から俺へと変わることもあれば、俺と言いかけて、けつまずいたようにあわてて僕に直したりすることもしばしばあります。息子にとってのまーさんも、いずれ卒業するときがくるのかもしれない。

素敵だなと思う話もありました。田中さんの「The distance to see you」（2019）という作品のエピソードで、田中さんが恋人とキスをするときの話です。口づけて相手に近づき輪郭もぼやけてくる。しかし相手がよく見えないからこそ、その存在だけを確かに感じられる。その時の体験がこれまでになく心地よかったと田中さんは言っていました。その話を思い返しながら、僕は相手との口づけの時にどう感じていたのだろうか、とふと思います。確かに相手の存在を感じられると思いつつ、僕はその存在だけを感じる僕の意識だけを感じてしまう、なんだか残念に引いて見てしまうようなところがあって。それよりはそう、田中さんが言っていたようなことだったら、僕はハグの方がじっくりくる。相手の重さや温かみがしっかり量れるからでしょうか。そんな気がします。

結局何が言いたいのか、という話なんです。田中さんの作品にまつわるエピソードを聞くと、関わる人や事柄に、真摯な配慮と、それが故の葛藤を感じるすることができます。それが田中さんの、ひいては作品の魅力につながっているのでしょう。そんな人柄と作品に触れると、先に述べてきたような日々の自分のさまざまな事柄を思い出すのです。わりきれないこと、自分はこうだと思ってしまうせつない線引きのようもの。これらのたどたどしいバランスを保とうと日々生きていること。なかなか難しいことです。それがうまくできているとも思えない。ある事柄に対して「難しい」と一言で言ってしまう場合、その「難しい」にどれだけの言葉が込められているのでしょうか。また、人によってはこう問いかけてもいいかもしれません。「難しい」と放ったその一言にどれだけの言葉を込めたのですか、と。（※2）

うつろいゆく主語のように。相手の存在を確かめる機微や違いに。そういった出発点がある。今回のことだってそう。僕と田中さんがはじめたかったのは、この出発点からだったのだと思います。

※1…田中 永峰 良佑「僕、俺、私…」（2009年）映像

※2…でも、そうですね。自分の子供にレオ・レオニの絵本「フレデリック」（訳：谷川俊太郎、好学社）をしばしば、読み聞かせするのですが、フレデリックの「そういうわけさ（I know it）」という一言、というか三言？は、何度声に出して読んでもいいなあと思います。彼は、ぶっきらぼうかもだけど、ちゃんとやるべきことをやっているからだと思います。

図師雅人さんをインタビュー後のエッセー

“I felt he'd found my letters and read each one out loud
I prayed that he would finish but he just kept right on
Killing me softly with his song
Telling my whole life with his words, Killing me softly with his song”

“まるで彼は私の手紙を見つけて、大きな声で読み上げているよう
早く終わってと祈るけど彼は歌い続ける
彼の歌に私は優しく首を絞められているよう
私の人生を彼の言葉が語ってく 彼の歌に私は優しく首を絞められているよう”
（「Killing me softly with his song」作詞：Norman Gimbel 作曲：Charles Fox より抜粋）

僕がこの歌を初めて知ったのは大学生のころ、初めてニューヨークに向かう飛行機の中で、それはアートギャラリーを巡るツアーとかだったのだけど、その機内でなんとなく聴いていたラジオから Fugees がカバーする Killing Me Softly With His Song が聴こえてきて、それで妙に好きになってしまった。そのあと、ニューヨークに着いて何日か経って一人で歩いていたら、地下鉄で キャッシュカードをなくしてしまいお金がなくなり、ダウンロードしたこの曲を聴きながら、グレープ味のガムが熱で溶けたような匂いの地下道で、やたら惨めで孤独な気持ちで、泣きそうになりながら人とすれ違ったのを覚えている。

Killing me softly with his song

“心が動くことはあっても、誰かが作る歌がそんなにも、自分の心を刺すってどうということなんだろう、そんな歌が自分にもあるなら今ここで聴きたい”とか思って、寂しくしょうがなかった。

「僕たちが行ったお互いのインタビューを、書き起こすのではなく、エッセーにしませんか。」という提案を図師さんからいただいて、いいなと思ったもの、あれこれ考えて書いては消したりしていたら、やがてこの曲が頭に流れてきた。

図師さんは大学生の頃に、実家に帰省すると、よく Brian Eno の「Ambient 1: Music for Airports」を聴いて散歩をしていたという。宮崎の、夜の、バイパスの道の向こう、遠いところにぼつぼつと光が明滅しているのを見ながら「Brian Eno は自分と全く違う景色を見ながらこの曲を書いたのに、いま時間や場所の感覚を飛び越えて、自分の記憶と溶け合い、分ち難く結ばれている」と感じたそうだ。

図師さんの「作品」※では、さまざまな物がたくさん散りばめられていることも多く、一つのタイトルはついているものの、それは固有の塊や空間という感じでもなくて、たとえば”過去”の作品を構成していたものが、新しいの作品のものとしてまた現れたりすることもある。どこからどこまでが“過去”の「作品」で、“現在”のあるいは“未来”の、“自分”の「作品」なのか、つい使い勝手のいい言葉でまとめてしまうものの境界線を、穏やかに、ずっと自問自答して、他問他答している気がした。

この図師さんと藤林悠さんが企画された「完璧に抗う方法」での、参加作家に「子供のころのこと、初めての美術との出会い、そして今までに作品として制作した作品を可能な限りすべて話してもらおう」ということも、一つの地点や一つのコンセプトで作品、もしくは人間を捉えようとしない図師さんの考え方みたいなものが反映されていて、すごく好きだった。結局、お二人は僕に合計 9 時間ぐらいのロングインタビューをしていただいて、そして僕も、話が聴きたくなり、一緒に展示をすることになった図師さんに同じ時間ぐらいのインタビューをさせてもらった。

図師さんはさまざまな話をしてくれたけど、特に僕が好きな(?) 話がある。個人的な話なので、許可をいただいて書いけれど、近年、図師さんのお父様が、政治的な話をすると、極端な、図師雅人さんからは偏って聞こえることを言うようになり、そこで図師さんは、父親と手紙のやりとりをすることを始めたという。誰かに見せる予定もないという、その手紙を想像する。どんな手紙なのだろう、いったいどんな言葉で、どんな字で、どんな風に目の前の紙を触って、見つめたり目を離したりして、わかりあおうとしているのだろう？ そのひとつひとつの瞬間を想像するだけで、僕は、なんという心が揺らいで、不安で、そしてたくましい気持ちになる。

たとえば誰かが、あるいは僕が / 私が、何かを言うとき、それはいったいどんな過去を、世界を、人を引き連れて、その言葉は発されていくのだろう？と思う。少なくともそれは、きっと、ここにいるだけではわからないことで、何かをしなければわからないことで、”わかる”と言ったってはっきりとした答えは誰も持ち合わせていないだろうけど、それでも、その言葉に、人に、向き合い続けることを諦めたくはない、と僕はお話を聞かせてもらうなかで自ずとそう思った。

もしかしたら、その諦めない過程で、あなたや、あなたや、あなたや、あなたの人生にだって、あの歌のように、いやあの歌のようじゃなくたって、出逢い“合える”瞬間だってあるのかもしれない、そう思って、不安でたくましい気持ちで、今はいる。

※個別の作品の様子は図師雅人さんの HP よりご覧ください。